

五ノ一八 解脱上人伝

出典 笠置寺所蔵の現物

解説 笠置寺の中興の祖と云われる解脱上人貞慶の伝記である。保存の箱蓋には「解脱記玉置氏作」とある。藤堂藩城和奉行に延宝五年（一六七七年）から六年間、玉置甚三郎なる人物が存在しており、この伝記も藤堂藩から寄進されたものと思われる。前半内容は元亨釈書とほぼ同じである。

笠置寺に保存されている笠置寺縁起写本の末尾にこの解脱上人伝が綴じ込まれている。

原文

元暦の比解脱上人てふひしりいまそかりける尚書左丞ふちはらの貞憲の男とかや其いる夢に高僧来りて我は貞慶となむいひもあへすふところに入ぬこれよりして只ならず儲にし子也けりわらはより薙染のころさしあさからすつゐに青丹吉ならの京山階寺にしてほるとけて貞慶と号しいろのかりいひつかはしける過こし夢をはかなみ心より外つゆもらさゝりしかうやうの正しきうつゝに今更胸にさはかれてひたすら累世の比丘なる事をおもふ給ふ才誉人にすくれ其心はへ無我也或時最勝講のみことのりに応しなからまつしくて乗僕を人のもとに求しほとに会にをくれ官使にうなかされてまられるける会衆の莊服花をかさし堂上にみちにたるに例のあやしのや（「ふ」がぬけ？）れころもさなから山田の驚鹿やうの物に似かよひぬれは官僚緇伍鼻のほとおこめくもことはりにこそあめれ今やうの家を出し輩は法儀にしたかはす浮誇をきそふのみ也此徒となかく等伍すへからすとおもふ給ふて五日の宮講三とせのほとゝまち侘てすみこしならのみやこをよそのゆふくれに見そなはし侍りて山城の国笠置といふ山の窟にこもり給ふ

めるすへらき楊柞の御あそひをことゝし給ひ  
よく鹿を射したまふ暮年に懺悔して仏宇  
をいとなみ鹿福をすゝむ此ひしりの徳望を  
きこしめされつゝに御落慶の導師となし  
めされけるに興なとまいらせけれどもいなみて  
かちよりしてやせ杖手にありやふれ笠肩  
にあり玉階のほとりに此二物を安置し給ひ  
意気自若にして宮中に入座にのほり詞弁婉  
暢せり上皇をはしめまいらせ月卿雲客其説法を  
あふき彼朴素をたふとみ給ふ春日の神祠にまう  
てたまふ時は、群鹿前のあしを折るとかやかゝ  
る貴きひしり窟にいますと聞つたへてみやこ人  
難波人の袖をつらねしはさら也ちかきはも  
とよりとをつ国までの貴きといやしきも上  
人拝みにとかいつらねてまうて来るほとに酒麴茶  
市のともからかりやをしつらひすたれをかゝけ幔  
を引さしにも寂々たる山の奥美々しき都  
路のやうに南ありける其比梅尾の山に明恵  
とて、此ひしりと日比物せし上人いまそかりける  
彼窟こもりのなつかしさにはる々々とふらひ給ふ  
けるにおもふにかはる事を  
来て見れハこゝもみやこにすみなして  
おもひしほとは棄ぬ也けり  
かく筆にいは

せてあはて空しく帰り給ひぬひしりすし  
返してふかく恥らひ給ふにやありけむみそかに  
窟を出て程遠からぬ海住山となんいふ所に  
入て

立ちよりて影もうつさしなかれては

うき世に出る谷川の水

となんなかめたまふて

溪の水音に名利の夢を覚し嶺の松風に

浮世の塵をはらはせつゝ終焉し給ひけると  
なむ